東京学芸大学附属高等学校紀要　53　pp.53～66，2015

コンピテンシー・ベースによる学校行事の再評価

― 辛夷祭の教育効果の評価に向けて ―

Re-evaluating School Events through a Competency Based Approach

― Assessment of the Educational Effectiveness of the School Festival, *Kobushi-sai* ―

生徒指導部

齋藤　洋輔　　佐藤　亮太　　神田　春菜　　瀧澤　政彦

<要　旨>

現在，次期学習指導要領の改訂に向けての議論が盛んになっている。特に“資質・能力の育成”という観点は重要視されており，特別活動も例外ではなく，その教育効果や教育課程での位置づけは，今後，より問われることになるだろう。そのような現状を受け，本校でも辛夷祭の意義を議論し，その教育効果を明らかにし，より良い伝統を引き継がなければならない。そこで本研究では，その議論の基礎資料として，本校生・本校教員を対象としたアンケート調査を実施した。その結果，準備の負担のアンバランスが存在することや，辛夷祭の活動が日常生活から乖離したものであることが明らかになった。また，生徒と教員の間では意識のズレも多く見られ，両者の理想としているものは現状では異なっている。そこで今後，辛夷祭が能力の育成の場として，本校の教育課程の中でより機能させるために，本研究でのアンケート調査をもとに，PBL の視点を踏まえて，いくつかの改善方法を提案した。

<キーワード>　辛夷祭（特別活動）　コンピテンシー・ベース　次期学習指導要領改訂
PBL（Project Based Learning）

1．はじめに

現在，次期学習指導要領の改訂に向けて，文部科学省のさまざまな部会で議論が続いている。その中でも特に注目を集めているのが，教育課程部会教育課程企画特別部会での議論で，“資質・能力の育成”という観点であろう。教育課程企画特別部会における論点整理（文部科学省，2015；以下，論点整理と表記）では，次期学習指導要領のあり方について以下のように示している。

・資質･能力を育成するために「何を学ぶのか」という，必要な指導内容等を検討し，その内容を「どのように学ぶのか」という，子供たちの具体的な学びの姿を考えながら構成していく必要がある。

つまり，育成すべき資質・能力を明確化し，教科横断的・総合的に育成し，その成果を正当に評価することに対して，今まで以上に注力するということである。背景には，教科・内容主義的なコンテンツ・ベースの現行の学校教育が，果たして資質・能力を確実に育成できているのかという反省があり，改めて教育活動全体をコンピテンシー・ベースで見直すことで，より良い学校のあり方を模索しようとしているのである（安彦，2014）。

また，このような資質・能力の育成の場は，教科教育の授業の時間だけに限られる訳ではなく，学校行事などの特別活動や，総合的な学習の時間なども含め，学校で行なわれるすべての教育活動全体を通して生徒の人格の完成を目指すものである。改訂の趣旨は，至極当たり前の学校教育のあり方を示しているが，逆に言えば，現行の学校教育や特別活動をめぐる現状への問題提起であるとも言えるだろう。

そこで本研究では，本校の学校行事の中で最も盛んな行事である文化祭の「辛夷祭（こぶしさい）」を取り上げ，その現状の把握に努めるものである。具体的には，指導している教員と行事を運営している生徒にアンケート調査を実施し，辛夷祭に対する意識を把握したいと考える。

このような活動を通して，本校の伝統の一部である辛夷祭を見直し，未来に継承すべくより良い辛夷祭のあり方を模索するものである。そして今後の方向性としては，辛夷祭で身につけさせたい資質・能力の明確化と，教育課程全体における辛夷祭の意義の明確化を目指すものである。

2．本研究の背景

2－1　次期学習指導要領における特別活動のあり方

2－1－1　カリキュラム・マネジメントの重要性と特別活動の位置づけ

論点整理（文部科学省，2015）では，学習指導要領等の理念を実現するための必要な方策として，カリキュラム・マネジメントの重要性を強調している。資質・能力の育成の観点から教育課程全体を整理すること（カリキュラム・マネジメント），そしてその中での特別活動の位置づけについて以下のように示している。

・これからの時代に求められる資質・能力を育むためには，各教科等の学習とともに，教科横断的な視点で学習を成り立たせていくことが課題となる。そのため，各教科等における学習の充実はもとより，教科等間のつながりを捉えた学習を進める観点から，教科等間の内容事項について，相互の関連付けや横断を図る手立てや体制を整える必要がある。
・特に，特別活動や総合的な学習の時間の実施に当たっては，カリキュラム・マネジメントを通じて，子供たちにどのような資質・能力を育むかを明確にすることが不可欠である。

さらに，論点整理（文部科学省，2015）では，特別活動における話し合いの重要性や資質・能力の育成に関して以下のような記述が見られる。

・自分たちが所属する集団や社会の充実と向上のため，教科等で身に付けた資質・能力を活用し，意見の違いや多様性を生かしつつ集団としての意見をまとめていく話し合い活動などは，社会参画の意識や合意形成のための思考力・判断力・表現力等を養うものである。

現状においても，特別活動は人格形成や能力育成の場として教員からは捉えられていることだろう。しかし，それは教員の感覚的な議論であることが多く，特別活動を通して，実際に生徒の能力が育成されているかを評価する場面はほとんど見られない。また，学校の教育課程全体の中に特別活動を位置づけ，教育目標との関係を明確化できている場面も少ないだろう。本校も決して例外ではない。つまり次期学習指導要領の改訂の趣旨は，生徒個人の資質・能力の育成の観点に立ち，現状の教育活動を例外なくすべて見直そうというものである。

2－1－2　特別活動における現状・課題と今後のあり方

論点整理（文部科学省，2015）では，特別活動（特に学校行事）の現状と課題を以下のように分析している。

【現状】
・学校行事においては，各校において創意工夫に満ちた取組が進められており，「文化祭」，「体育祭」，「修学旅行」やボランティア活動などでは学校独自の文化を創り出している。その基盤には生徒会の協力など，生徒の声を生かした学校行事の運営がある。また，地域や学校間の連携により地域文化の創造に寄与している学校行事も多い。
・よりよい人間関係を築くこと，自己を生かす能力を養うことの必要性は今後ますます高まると思われる。

【課題】
・学校行事が，生徒の意欲を尊重しすぎたり，伝統の継承や発展に重きを置きすぎたりするあまり，学校行事が生徒にとって過重負担になっている場合がある。
・学校行事が，学校全体の取組とならず，担当者任せになっていないか点検の必要がある。

本校の辛夷祭においても指摘されているような課題が存在する可能性は十分高いと考えられる。そこで，これらの課題が辛夷祭の現状として存在するのかどうかはアンケートで確認すべき内容と言えよう。

また，論点整理（文部科学省，2015）では，特別活動（特に学校行事）の今後のあり方について以下のように述べている。

<u>特別活動で身に付けさせたい資質・能力の明確化</u>
・特別活動において身に付けさせたい，現在及び将来の生活につながる資質・能力を再確認する。
・積極的な社会参画につながる合意形成にむけた活動（話し合い活動など）の重要性を確認する。

<u>教育課程全体における特別活動の意義の明確化</u>
・特別活動を通じた，望ましい学級集団の形成が，教育課程全体における「主体的・協働的な学び（アクティブ・ラーニング）」を推進する基礎を作るものであることの強調。
・各教科で学んだことを，ホームルーム活動や生徒会活動，学校行事を通じて，自分自身や学級の実生活に直結させる場であることの強調。
・特別活動の目標や成果から学校全体，特に教務部が関

わり指導体制を確立することの重要性を明確化。

特別活動（学校行事）での運営を通して得られた経験が実生活に直結しているか，特別活動が合意形成にむけた話し合い活動の場となっているかなど，本校の辛夷祭が特別活動のあり方に沿ったものであるかはアンケートで確認する必要があるだろう。

2-2　本校におけるコンピテンシー育成の取り組み

本校は，平成24年度より文部科学省指定スーパーサイエンスハイスクール（以下，SSHと表記），平成26年度より文部科学省指定スーパーグローバルハイスクール・アソシエイト（以下，SGH-Aと表記）に採択され，共にキー・コンピテンシーを中心に据えた教育カリキュラムの開発に取り組んでいる。キー・コンピテンシーとはOECDが提唱した概念で，ライチェン & サルガニク（2006）ではキー・コンピテンシーを以下の3つのカテゴリーで表している。

キー・コンピテンシーの3つのカテゴリー

1．相互作用的な道具の活用（a. 言語，シンボル，テキストを相互作用的に活用する力，b. 知識や情報を相互作用的に活用する力，c. 技術を相互作用的に活用する力）
2．社会的に異質な集団での交流（a. 他者とうまく関わる力，b. 協力する力，c. 対立を処理し，解決する力）
3．自律的な活動（a.「大きな展望」の中で活躍する力，b. 人生計画と個人的なプロジェクトを設計し，実行する力，　c. 自らの権利，利益，限界，ニーズを守り，主張する力）

2-1-2の議論から考えても，辛夷祭のような特別活動では，主にカテゴリー2やカテゴリー3のようなコンピテンシーの育成を目指していかなければならないだろう。そこでこれらのコンピテンシーの育成を視野に入れ，アンケートを作成するものである。なお，以降では，上記のライチェン & サルガニク（2006）のカテゴリー分けを用いる。

3．辛夷祭に関するアンケート調査

3-1　アンケート調査の実施

3-1-1　アンケート調査の目的

上記の背景を踏まえ，本研究におけるアンケート調査の目的を，辛夷祭のあり方を議論するための基礎資料を作成することに設定し，具体的には以下の3点を明らかにするものである。

(1)文部科学省の指摘する課題が本校にも存在するか把握する。
(2)生徒・教員間の意識のズレを把握する。
(3)学年別・役職別の意識のズレを把握する。

なお，辛夷祭に関する役職として，辛夷祭委員会執行部（以下，執行部と表記），辛夷祭委員（以下，辛夷委と表記），ユニット責任者（以下，ユニ責と表記）を挙げ，それ以外の生徒を一般生徒とした。

辛夷祭委員会とは，辛夷祭を企画・運営する委員会のことである。中でも辛夷祭委員長・副委員長と各課の課長で構成されるのが辛夷祭委員会執行部（執行部）であり，辛夷祭に関わる事項はここで議論され，決定される。また，各クラス・部活動での企画の責任者をユニット責任者（ユニ責）と言い，ユニ責はユニットを束ねる役割とともに，執行部の各課から指導を受ける立場でもある。

3-1-2　アンケート調査の作成

上記のような，文部科学省から指摘されている特別活動に関しての問題提起やあり方，そして本校で行なわれている能力育成の観点を踏まえ，本論末の資料のように，生徒用のアンケートを作成した。また，以下のような意図のもと質問の内容を作成した。

Q 01-Q 03：学年や性別，辛夷祭での役職に関する質問

Q 04-Q 10：辛夷祭一般に関する質問

生徒たちがどのように辛夷祭を捉えているかを明らかにするためのものである。また，文部科学省が指摘するような，準備の負担感や日常生活へのつながり，能力育成などに関する質問も加えている。

Q 11-Q 14：キー・コンピテンシー2aに関する質問

「他者とうまく関わる」という観点で，共感つまり他者の視点に立つことが重要である（Ridgeway, 2001）。そこで自分自身をふりかえることができたかを明らかにする質問を加えている。

Q 15-Q 19：キー・コンピテンシー2bに関する質問

「協力する」という観点で，自らの考えを示すこと，他者の意見に耳を傾けること，自らの具体的な役割や

責任を理解すること（ライチェン & サルガニク，2006）をキーワードとして，辛夷祭委員会や各ユニットへのコミットメントのし方を明らかにするものである。

Q 20-Q 23：キー・コンピテンシー 2c に関する質問

「対立を処理し，解決する」という観点で，対立や利害の調整，合意形成（ライチェン & サルガニク，2006）をキーワードとして，辛夷祭における対立への対処のし方を明らかにするためのものである。

Q 24-Q 27：キー・コンピテンシー 3a に関する質問

「大きな展望」とは，自らの行動を決定づける大きな規範であり，個人が小さなプロジェクトを実践するにあたっても影響するものである。そこで大きな展望の入口として，辛夷祭におけるモチベーションを明らかにするためのものである。

Q 28-Q 33：キー・コンピテンシー 3b に関する質問

「プロジェクトを設定し，実行する」という観点では，どのような基本理念のもと，プロジェクトの目標を実現させるために時間や人的資源を活用できたかが重要である。そこで辛夷祭の活動において，どのように計画を設定し，実行したかを明らかにする質問を加えている。

Q 34-Q 35：キー・コンピテンシー 3c に関する質問

「自らの権利を守る」という観点で，自らの権利の範囲を知っていることは必要なことである。そこで辛夷祭における権利の範囲を示した辛夷祭募集要項への理解の度合いを明らかにする質問を加えている。

教員用のアンケートも基本的には生徒用のアンケートと同じ質問内容にした。ただし，以下の例のように，教員には，生徒の活動がどのように見えているのかをアンケートし，生徒からとったアンケート結果と比較することにした。

（生徒用）Q 05 辛夷祭の準備の負担が大きい。

（教員用）Q 05 生徒たちにとって，辛夷祭の準備の負担は大きいと思う。

生徒用･教員用アンケート共に，5（大変あてはまる），4（少しあてはまる），3（どちらとも言えない），2（ほとんどあてはまらない），1（全くあてはまらない）の5段階で評価した。

3-1-3　アンケート調査の方法

生徒用アンケート（資料参照）を生徒たちに配布し，回答は Google フォームを用いて回収した。回答は任意提出とし，620 名からの回答を得た（全校生 1024 名，回答率 61%）。教員用アンケートは，質問紙で実施した。回答は任意提出とし，32 名からの回答を得た（教員 54 名，回答率 60%）。

3-2　アンケート調査の結果

3-2-1　文部科学省が指摘する課題について

図 1（Q04 辛夷祭に積極的に参加することができたか）を見ると，3 年生や執行部・辛夷委・ユニ責の生徒を中心に，辛夷祭への参加する姿勢を概ね好意的に辛夷祭を捉えていることが分かる。程度に差はあれ，教員も同様である。また，図 2（Q06 辛夷祭で満足感や達成感を得ることができたか）を見ると，程度に差はあるものの，図 1 同様に生徒・教員ともに好意的に辛夷祭を捉えていることが分かる。この中ではユニ責が若干否定的に捉えていることが特質的である。原因については後で述べる。以上より，従来のイメージ通り，生徒・教員ともに全体としては，好意的に辛夷祭を捉えていることが分かる。

次に，文部科学省が指摘している課題について分析する。図 3（Q05 辛夷祭の準備の負担が大きいか）を見ると，生徒・教員ともに準備の負担の大きさを認識していることが分かる。学年では 3 年生が若干大きい。そして，役職別では執行部とユニ責で格段に大きくなっている。対して，辛夷委や一般生徒ではそれほど大きくはなく，辛夷祭委員内・ユニット内にて準備における仕事量がアンバランスであることが伺える。このアンバランスの存在は顕著であり，今後是正すべき課題と言える。

図 4（Q26 辛夷祭の伝統のようなものを気にするか）を見ると，生徒・教員ともに伝統に縛られている場面も見られる。特に執行部や辛夷委にはプレッシャーが掛かっているようである。

また，図 5（Q07 辛夷祭の目的は，学校生活における思い出をつくることである）と図 6（Q08 辛夷祭の目的は，能力を獲得することである）を比較することで，辛夷祭の目的を考えてみる。多くの生徒が図 5 で示したように思い出をつくることに主眼が置かれ，図 6 で示したようにそれほど能力育成には意識が注がれていないことが分かる。また，教員においても，どちらの図でも 5 と答える割合が大変低く，辛夷祭の目的を明確化しきれていない様子が伺える。

さらに，図７（Q10 辛夷祭での経験が，日常生活に活きた場面があったか）を見ると，教員はある程度，日常場面とのつながりを期待していることが伺える。しかしながら，一般生徒にとっては，辛夷祭は日常の生活から切り離されており，互いに影響し合っているという意識は薄いようだ。この点は現状における大きな課題と言えよう。ただし，図６・図７で分かるように，執行部やユニ責では能力育成を実感し，日常場面で生きた経験も多くなっている。このような体験を出来る限り多くの生徒が経験できるような仕組みづくりは必要と考えられる。これらの現状にも，教員の間で辛夷祭の目的を明確化できていない影響が出ているのかもしれない。

以上のような議論から，文部科学省の指摘する課題について，以下の２点のような辛夷祭に対する現状を確認することができた。

(1)生徒・教員ともに辛夷祭を好意的に捉えている。
(2)文部科学省の指摘する課題が本校にも存在した。具体的には３点である。
・準備の負担は大きい。しかも負担の分配がうまくされておらず，執行部やユニ責に負担が集中している。
・辛夷祭委員は伝統に縛られている面が見られる。
・辛夷祭の目的は，能力育成という面には注力されておらず，一般の多くの生徒にとって，辛夷祭は日常生活とは切り離された存在と捉えられている。しかし，執行部やユニ責など一部の生徒には，能力が育成され，日常生活に活かされているという実感がある。

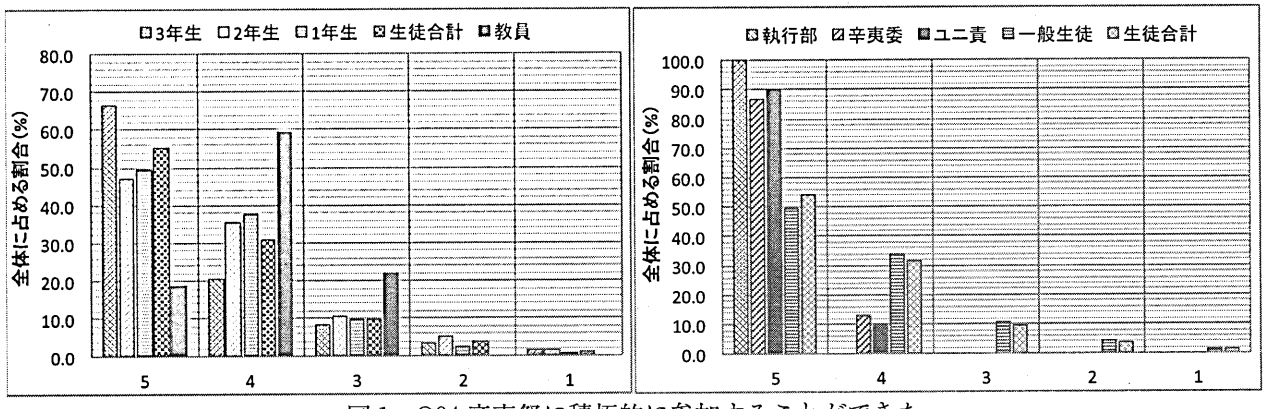

図１　Q04 辛夷祭に積極的に参加することができた
（左：学年別，右：役職別）

※以下，すべての図において，５（大変あてはまる），４（少しあてはまる），３（どちらとも言えない），２（ほとんどあてはまらない），１（全くあてはまらない）の５段階の評価とする。
※以下，すべての図において，全体に占める割合（%）とは，学年別であれば所属する学年の回答者全員に占める，役職別であれば所属する委員会の回答者全員に占める，それぞれの意見の割合を示す。

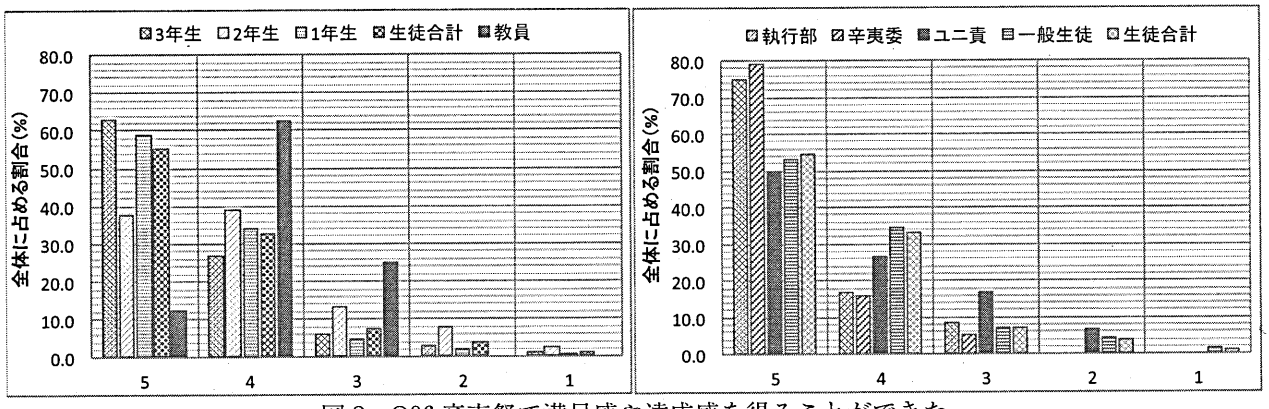

図２　Q06 辛夷祭で満足感や達成感を得ることができた
（左：学年別，右：役職別）

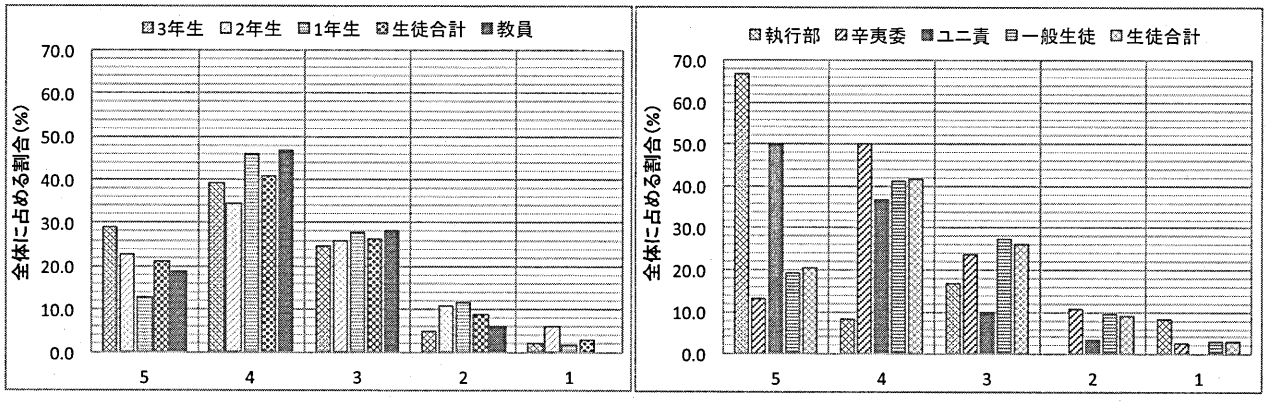

図3　Q05 辛夷祭の準備の負担が大きい
（左：学年別，右：役職別）

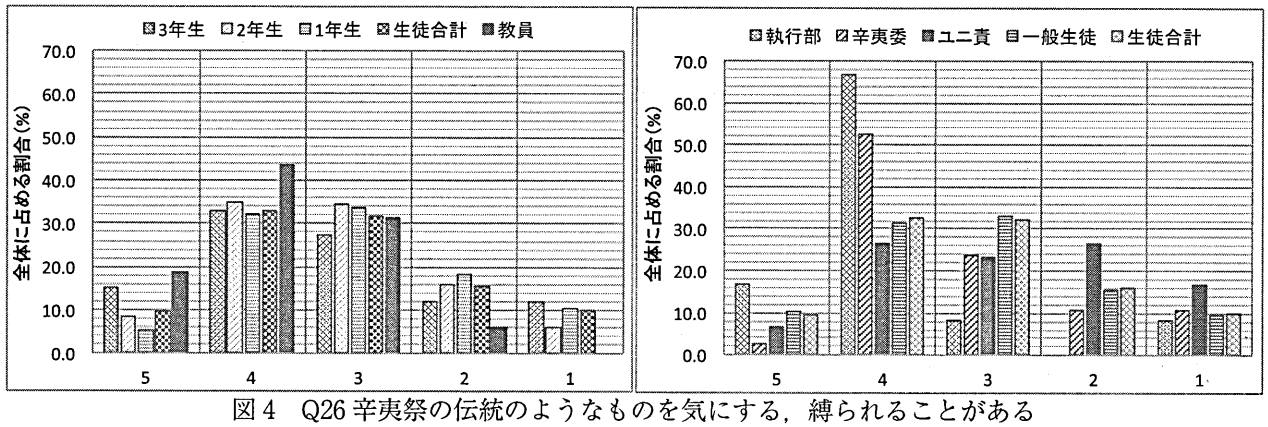

図4　Q26 辛夷祭の伝統のようなものを気にする，縛られることがある
（左：学年別，右：役職別）

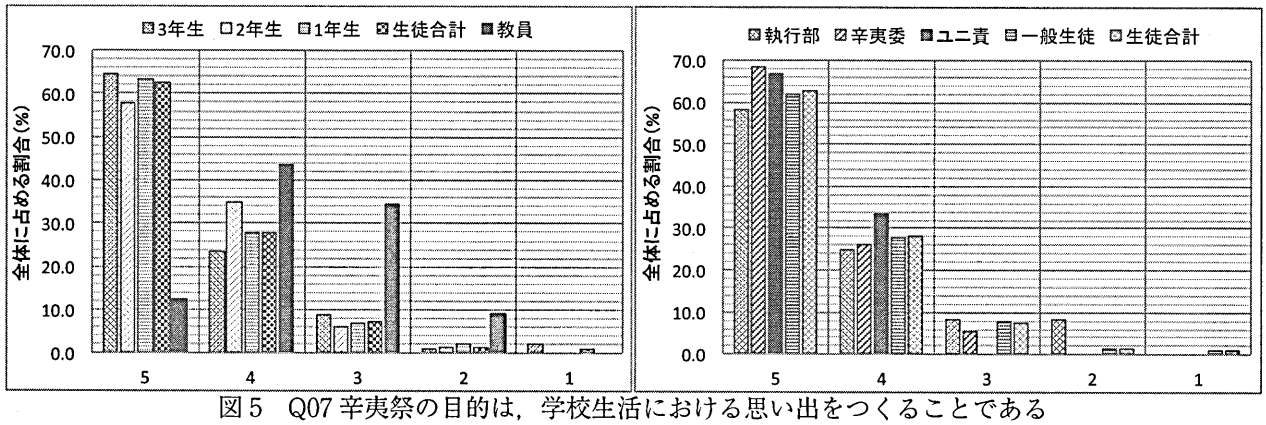

図5　Q07 辛夷祭の目的は，学校生活における思い出をつくることである
（左：学年別，右：役職別）

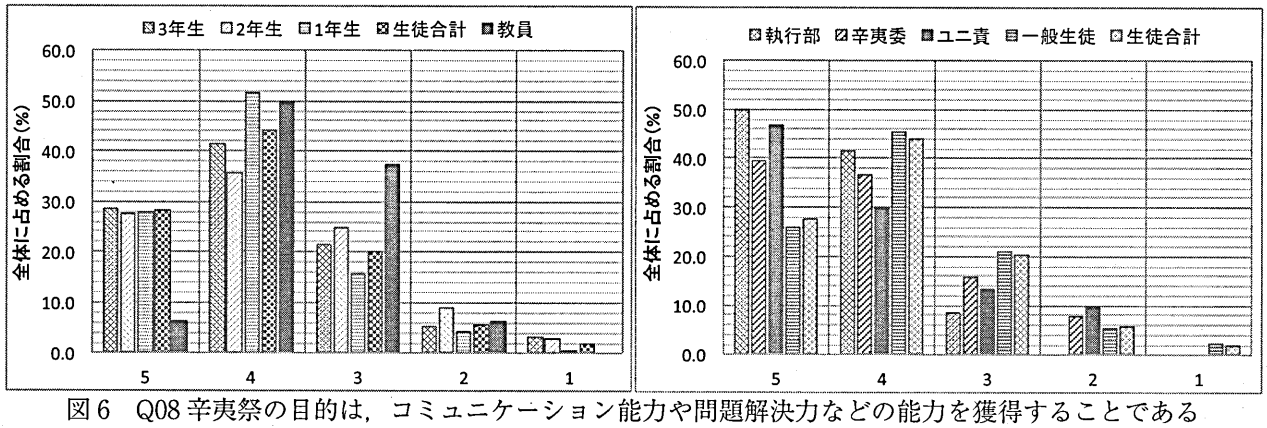

図6　Q08 辛夷祭の目的は，コミュニケーション能力や問題解決力などの能力を獲得することである
（左：学年別，右：役職別）

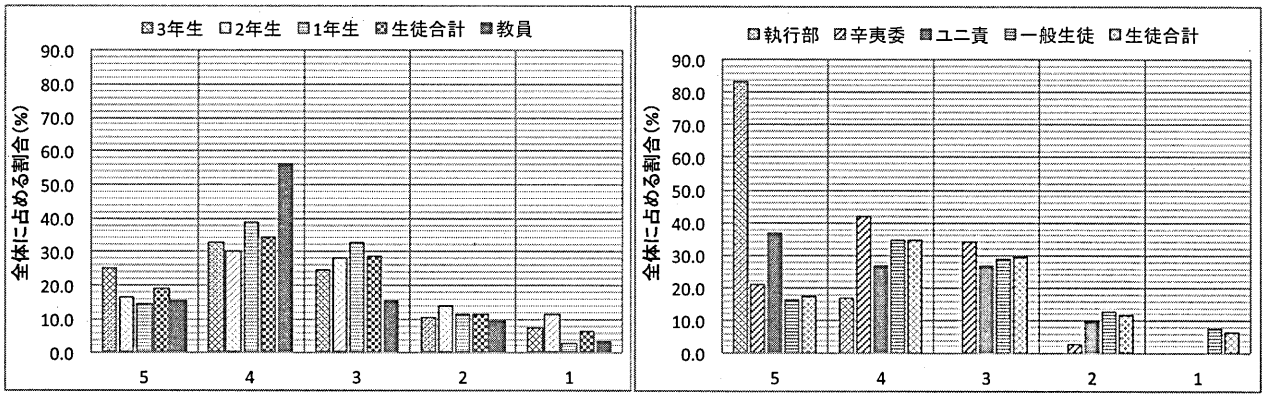

図7　Q10 辛夷祭での経験が，日常生活に活きた場面があった
（左：学年別，右：役職別）

3-2-2　キー・コンピテンシー（カテゴリー2；人間関係）育成について

まず，図8（Q16 話し合いの中で，自分の考えを示すことができたか）と図9（Q17 話し合いの中で，他人の考えに耳を傾けることができたか）を用いて，よりよい話し合いのし方について見ていきたい。2つのグラフに共通する特徴として，8割近くの生徒はある程度できていると評価しているのに対して，教員で5をつけた者は全くおらず，生徒の話し合いのし方には懐疑的な様子が伺える。また，役職別では辛夷委や一般生徒はあまり意見を積極的に言えていない。2-1-1 でも述べたように，話し合いや議論は，特別活動において，重要なものである。その点で生徒と教員の評価の間にズレがあるのは改善すべき課題と言えるだろう。もう少し共通認識ができるよう努めたい。

さらに，図10（Q18 自分の役割を見つけ，責任を果たすことができたか）と図11（Q19 ユニット責任者や辛夷祭課長などに言われた仕事を主にしていたか）を用いて，辛夷祭への参加のし方について見ていきたい。学年では3年生で，役職では執行部やユニ責で能動的に参加していたことが分かる。逆に学年では1年生で，役職では辛夷委で言われた仕事をしていた傾向が強い。1年生は辛夷祭に対する経験が少ないことなどが原因と考えられるものの，辛夷委が課長（執行部）に言われた仕事ばかりをしている体制には問題がある。上記のように，辛夷委が意見をあまり言えていない現状や，仕事量のアンバランス（3-2-1 参照）から考えても，辛夷委はより積極的に活動すべきであり，辛夷祭準備への参加のし方には改善すべき点が多いことが分かる。

次に，図12（Q20 意見の対立・葛藤があったか），図13（Q21 意見の対立を解決する場面が見られたか），図14（Q22 お互いの意見を主張し，合意を形成する場面が見られたか），図15（Q23 より良い活動のためには，意見が衝突するのもやむを得ないか）を用いて，ユニット活動や辛夷祭の運営における意見の衝突や，それらを解決するための合意形成について見ていきたい。まず，特質すべきは，8割程度の教員が葛藤や対立の場面が存在すると考えている点である（図12）。それに対して，対立の場面が存在すると答えている生徒は5割程度と，意識のズレが存在している。役職別では，意見をまとめる仕事である，執行部やユニ責で当然高くなっている。対立の解決（図13）や合意形成（図14）に関しては，生徒も教員も類似した分布で，それなりに成されているようである。役職別には執行部とユニ責で高くなっている。そして図15のように，生徒・教員ともにより良い活動のためには衝突もやむを得ないと考えている。つまり，生徒と教員の間には，葛藤や対立に対する程度に関してズレが存在していると言えるだろう。

以上のような議論から，人間関係面のコンピテンシー育成について，以下の3点のような辛夷祭に対する現状を確認することができた。

(1)話し合いのし方に関しては，生徒の実感と教員の評価の間にはズレが存在する。
(2)辛夷委の話し合いや準備への参加のし方はより積極的なものになるよう改善すべきである。
(3)意見の葛藤や対立はあるものの，教員が想像しているほど，衝突していない。生徒と教員の間で，葛藤や対立に対する程度に関してズレが存在する。

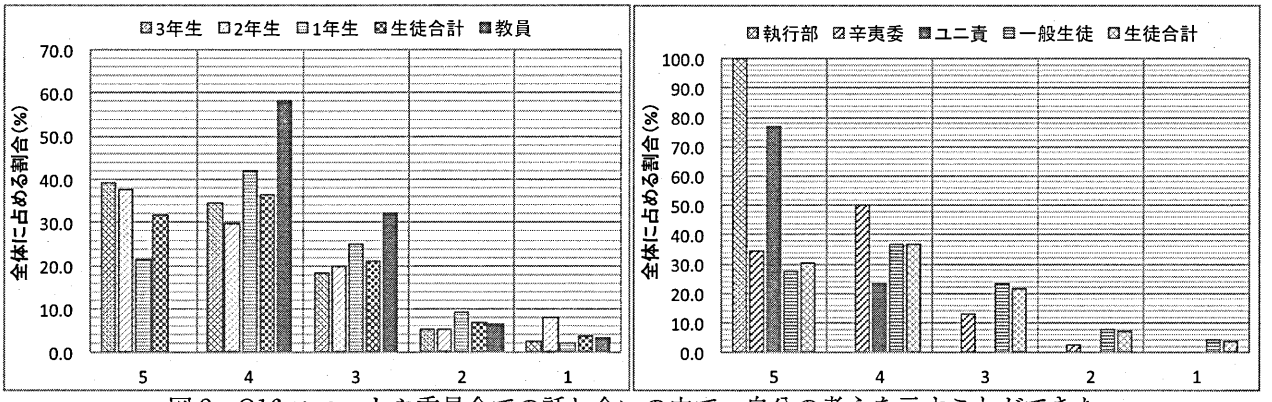

図 8　Q16 ユニットや委員会での話し合いの中で，自分の考えを示すことができた
（左：学年別，右：役職別）

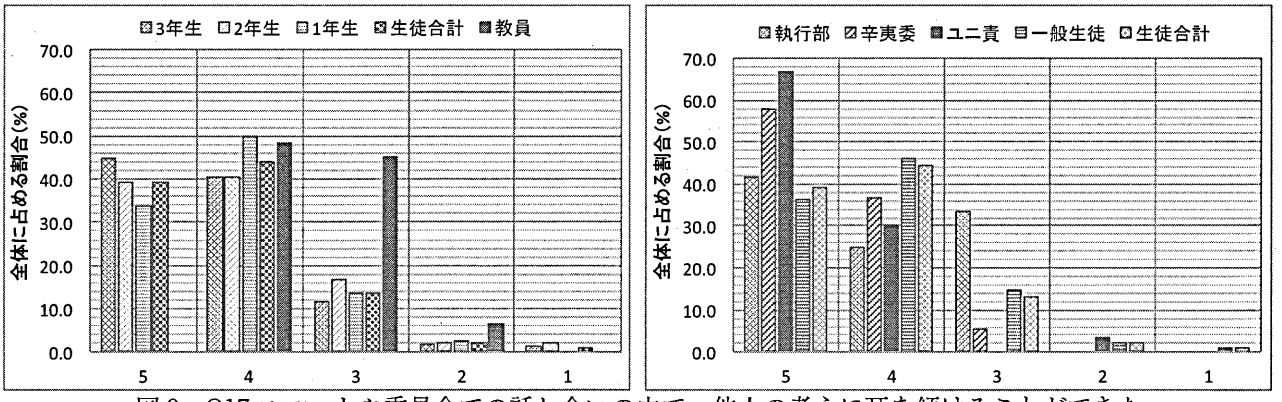

図 9　Q17 ユニットや委員会での話し合いの中で，他人の考えに耳を傾けることができた
（左：学年別，右：役職別）

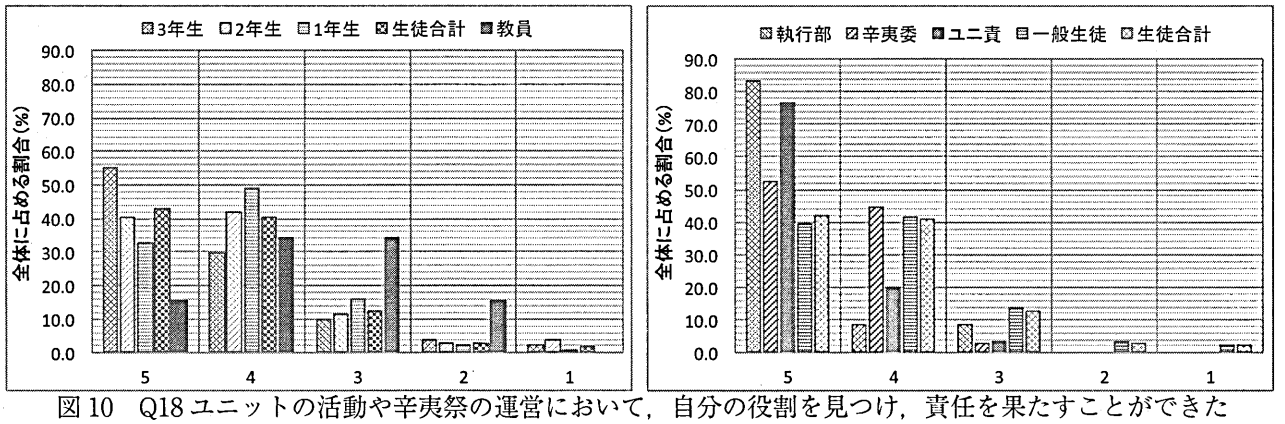

図 10　Q18 ユニットの活動や辛夷祭の運営において，自分の役割を見つけ，責任を果たすことができた
（左：学年別，右：役職別）

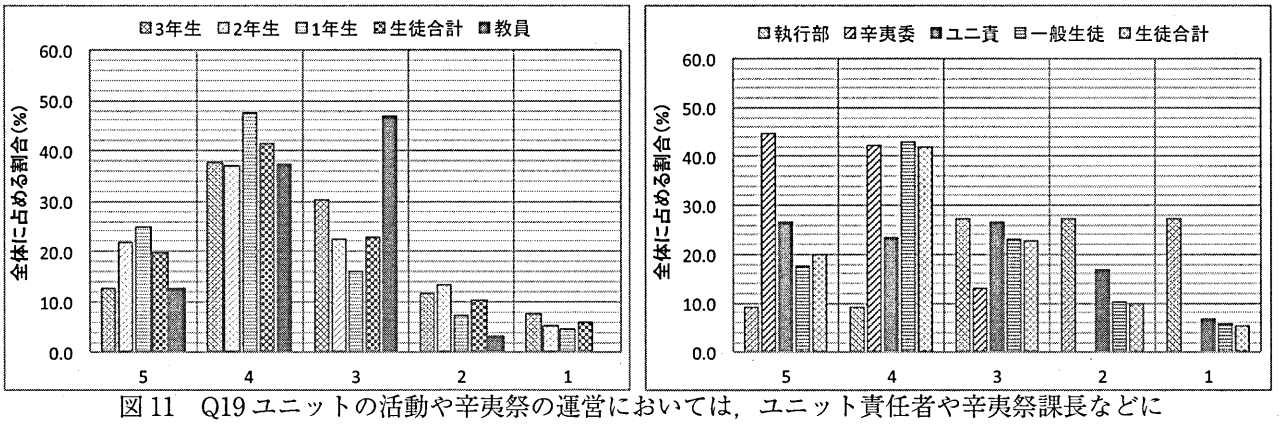

図 11　Q19 ユニットの活動や辛夷祭の運営においては，ユニット責任者や辛夷祭課長などに
言われた仕事を主にしていた（左：学年別，右：役職別）

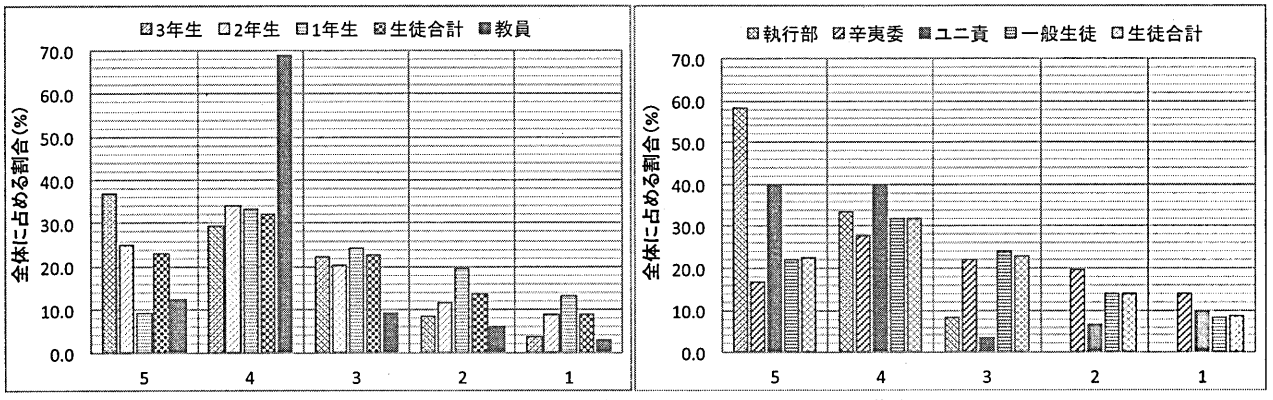

図 12　Q20 ユニットや辛夷祭委員会内で意見の対立・葛藤があった
（左：学年別，右：役職別）

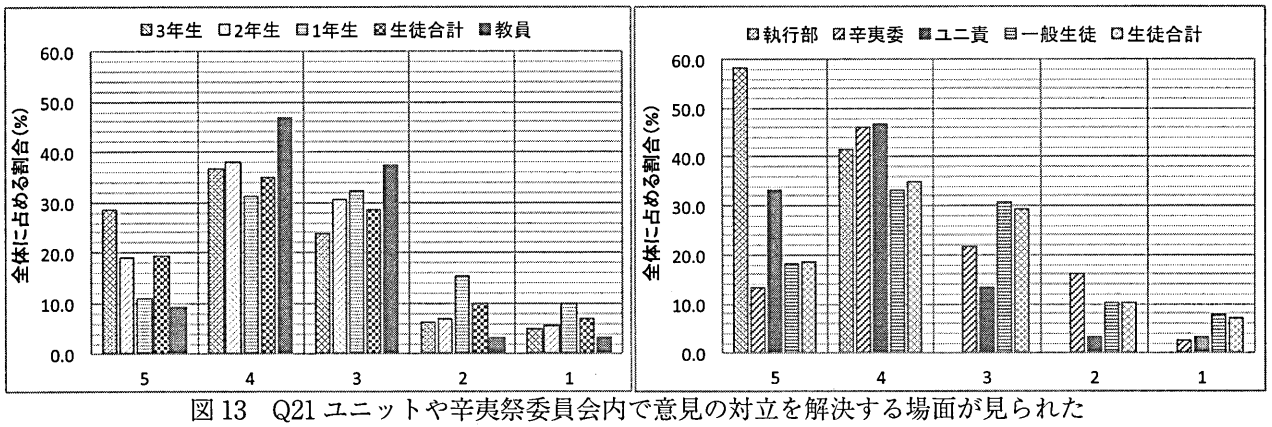

図 13　Q21 ユニットや辛夷祭委員会内で意見の対立を解決する場面が見られた
（左：学年別，右：役職別）

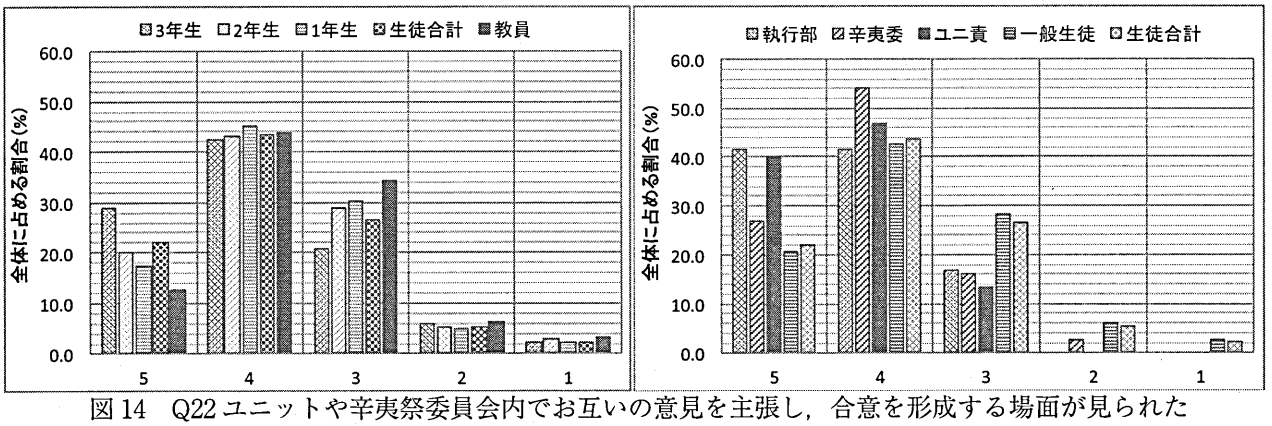

図 14　Q22 ユニットや辛夷祭委員会内でお互いの意見を主張し，合意を形成する場面が見られた
（左：学年別，右：役職別）

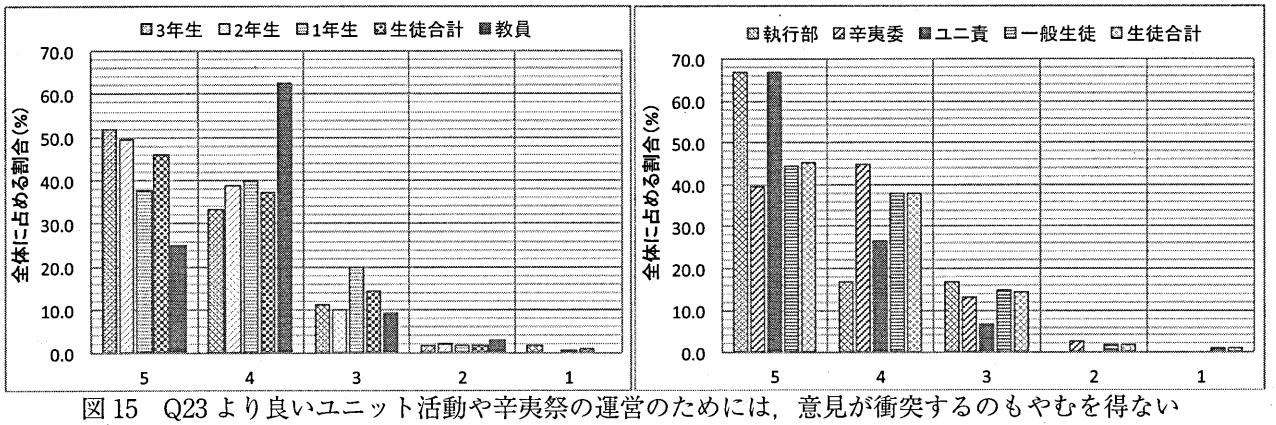

図 15　Q23 より良いユニット活動や辛夷祭の運営のためには，意見が衝突するのもやむを得ない
（左：学年別，右：役職別）

3-2-3　キー・コンピテンシー（カテゴリー3；自己啓発）育成について

まず，図16（Q24辛夷祭におけるモチベーションは満足感や達成感を得られることである）や，図17（Q25辛夷祭におけるモチベーションは良い賞をとることである）を用いて，辛夷祭への参加のし方としての，生徒たちのモチベーションについて見ていく。すると，8割以上の生徒は，満足感や達成感を得ることをモチベーションとして捉えているとともに，7割程度の生徒が，よい賞を得ることもモチベーションとして捉えている。つまり賞も辛夷祭においては一定のモチベーションとなっていると言えよう。その反面，執行部や辛夷委の中には賞を取ることはモチベーションではないと強く否定する意見も見られ（図17），今年度の賞改正（今年度より2年生の執行部の提案により賞の数を減らすも，3年生をはじめ多くの生徒から反対意見をもらう）の余波も見られる結果となった。また，図17では教員の意見も大きく分かれ，辛夷祭の意義や目的が不明確なことが影響しているものと思われる。

次に，図18（Q29計画的に物事をすすめることができたか），図19（Q30お客さんが楽しむことを第一に考え，計画することができたか），図20（Q32十分な話し合いのもとに計画することができたか）を用いて，辛夷祭における計画の進め方について見ていく。すると6～8割の生徒は計画性・ニーズの分析・話し合いなど，辛夷祭の企画立案やその実施に対しては，ある程度できていると実感している。しなしながら，教員の見方は否定的で，珍しく2や1に多くの票が集まっている。また，役職別では，特にユニ責（一部は執行部も含む）が企画立案やその実施について肯定的に捉えており，教員との意識のズレの大きさが問題と言える。これはまさに，辛夷祭委員会やユニットの指導において，生徒と教員間の共通認識が形成されていないことを如実に示している。この点は改善すべき大きな課題と言えるだろう。

最後に，図21（Q34募集要項の内容を把握しているか）を用いて，自らの権利の範囲を認識していたかどうか見ていく。5割程度の生徒は把握していると答えているが，教員はかなり否定的に見ている。また，役職別には執行部やユニ責は十分に認識しているようだが，5と答える辛夷委が少なく，一般生徒は否定的に答える生徒も多かった。これでは辛夷祭運営全体が効率的には進まないことだろう。また，現状としては辛夷祭委員会全体やユニット全体の主張というより，執行部やユニ責の主張により辛夷祭が運営されていると言わざるを得ない。逆に辛夷祭委員会としては，みなに読んでもらえる分かりやすい募集要項づくりに努めなければならない。

以上のような議論から，自己啓発面のコンピテンシー育成について，以下の3点のような辛夷祭に対する現状を確認することができた。

(1)辛夷祭に対するモチベーションとしては，満足感を得ることと，よい賞を得ることがあるが，前者の影響が大きい。
(2)辛夷祭の企画立案やその実施に対しては，生徒の実感と教員の評価の間には大きな意識のズレがある。辛夷祭のようなプロジェクトのつくり方には課題があることが分かる。
(3)募集要項への理解を向上させるために，分かりやすい募集要項づくりが求められる。

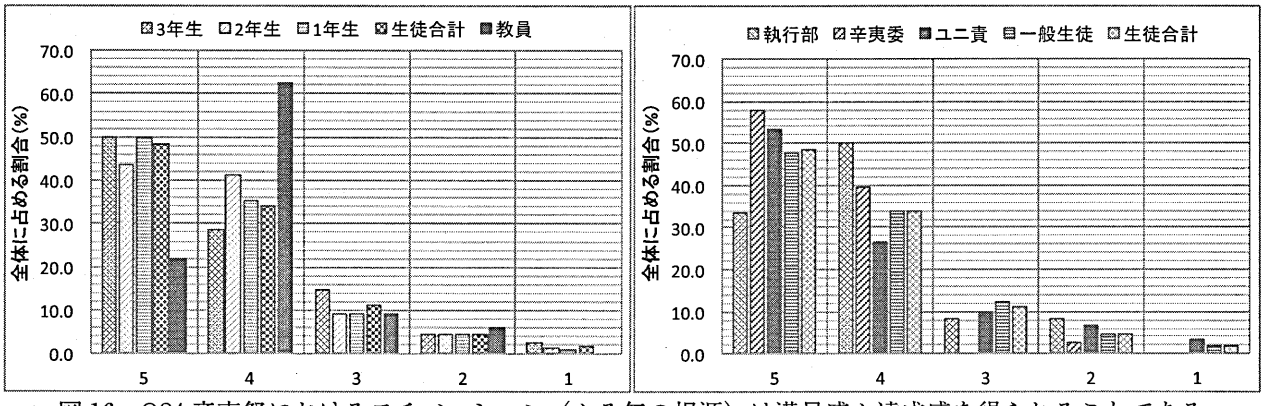

図16　Q24辛夷祭におけるモチベーション（やる気の根源）は満足感や達成感を得られることである（左：学年別，右：役職別）

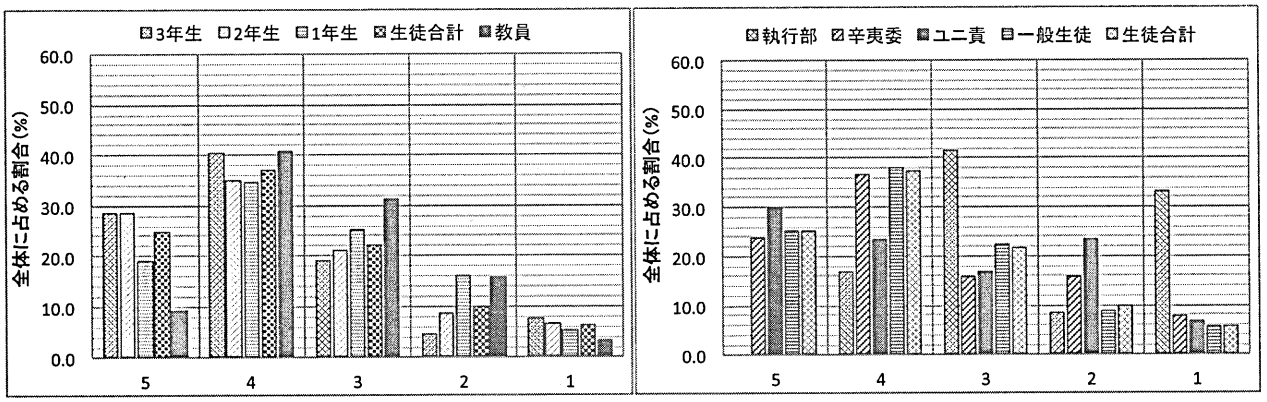

図 17　Q25 辛夷祭におけるモチベーション（やる気の根源）は良い賞をとることである
（左：学年別，右：役職別）

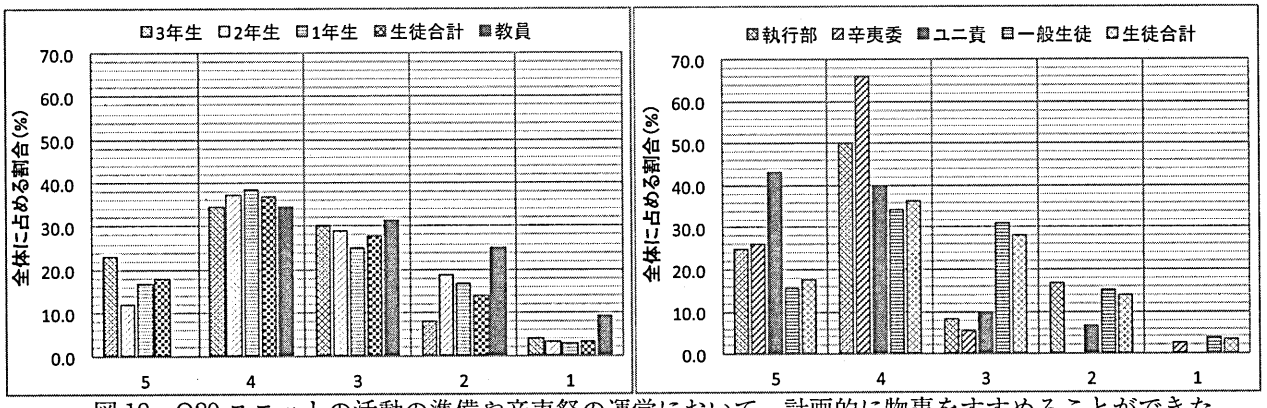

図 18　Q29 ユニットの活動の準備や辛夷祭の運営において，計画的に物事をすすめることができた
（左：学年別，右：役職別）

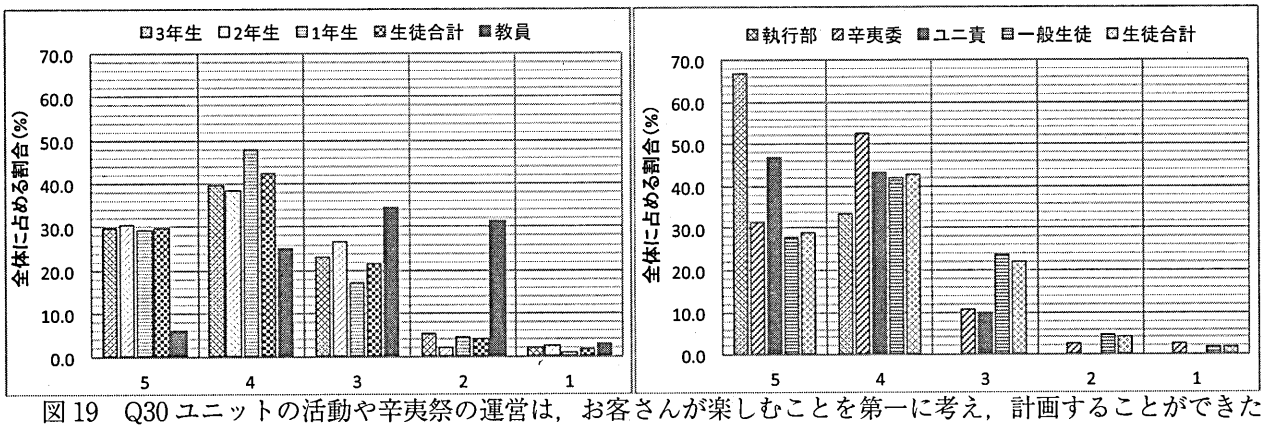

図 19　Q30 ユニットの活動や辛夷祭の運営は，お客さんが楽しむことを第一に考え，計画することができた
（左：学年別，右：役職別）

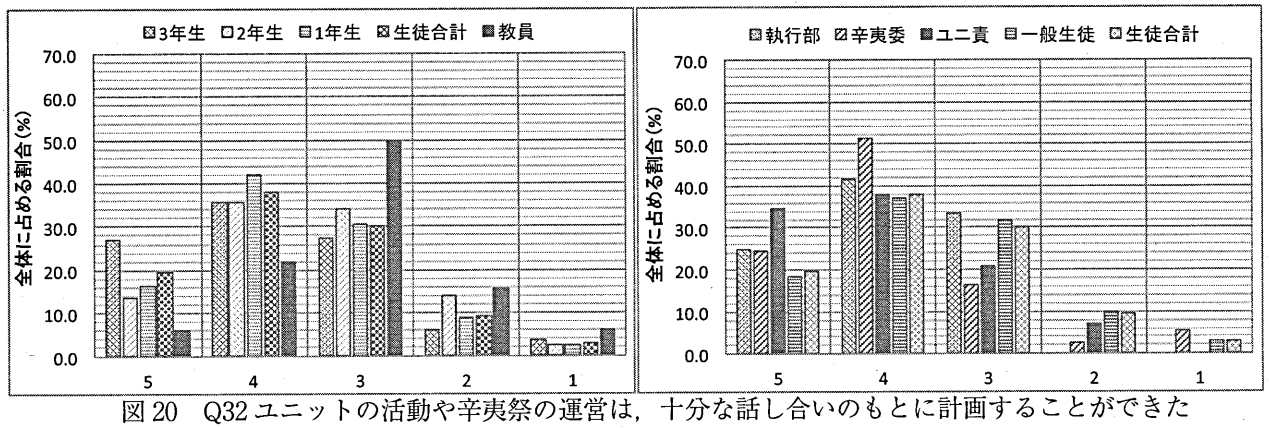

図 20　Q32 ユニットの活動や辛夷祭の運営は，十分な話し合いのもとに計画することができた
（左：学年別，右：役職別）

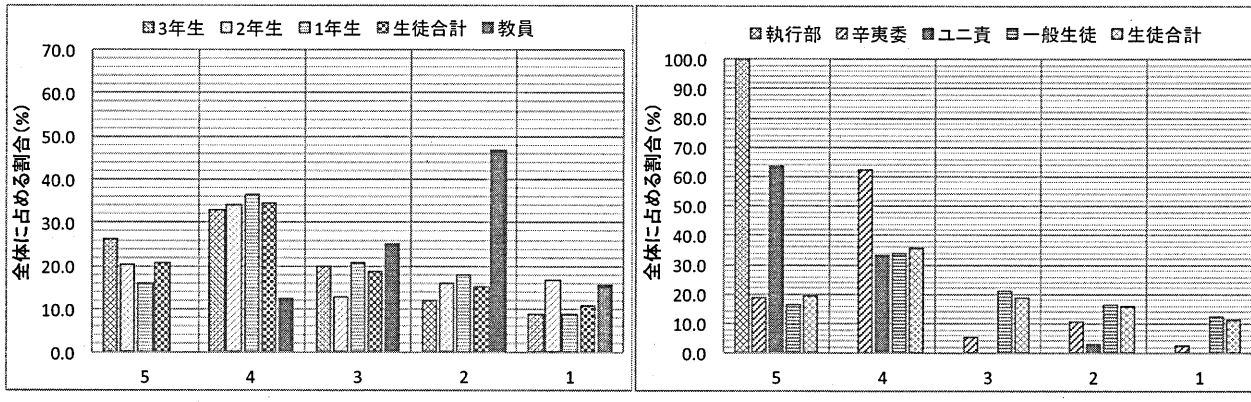

図21　Q34 辛夷祭募集要項の内容（自分のユニットに関する内容のみでも構わない）を把握している（左：学年別，右：役職別）

4．今後の展開

本校においては，生徒の自主性を重んじるという観点から，辛夷祭運営の多くの部分を生徒に委ねてきた歴史がある。しかしながら，以上のような議論を踏まえると，さまざまな面において生徒と教員の間に意識のズレがあったり（3-2-2や 3-2-3参照），生徒だけでは調整しきれない点（例えば,準備の負担のアンバランス）に歪みが生じていたり（3-2-1参照），これらのことから見ても，現状において，教員による指導不足の面は否めない。そこに今回の学習指導要領の改訂の趣旨も存在するのである。そこで今までの本校の歴史も鑑みつつも，具体的な対策が必要である。辛夷祭の内容の面で教員が生徒の自主性を強く縛るものではないが，運営のし方をより丁寧に教える機会や，教員－教員間・生徒－教員間・生徒－生徒間が共通認識をつくる場面を増やす必要があるだろう。そこで次のような3つの観点に基づいた対策を提案したい。

①現状の問題点の是正

準備の負担のアンバランスの解消

準備の負担のアンバランスという問題に関しては，辛夷祭委員会・各ユニットでの運営のし方を大きく見直す必要があると言える（3-2-1参照）。辛夷祭委員会では，生徒指導部の教員が意図的に執行部から辛夷委へ仕事を分担させる指導が必要である。各ユニットにおいては担当する顧問（主にHR担任）が，同様の趣旨の指導が必要である。

話し合いのし方のトレーニング

辛夷祭委員会・各ユニットでの議論をより充実させるために，執行部・辛夷委やユニ責を対象に話し合いのし方をトレーニングする場を設けたい。このような趣旨のイベントは本校SSHの企画として過去に実施したことがあるので，辛夷祭運営を意識した形で実施できればと考えている。このような活動を多くの生徒が体験することにより，生徒たちの話し合いの質を高めると同時に，ひいては辛夷祭やHR活動のさらなる充実を狙うものである。

②特別活動としての辛夷祭

文部科学省の指摘の通り，特別活動も学校カリキュラムの一部とあることを，今まで以上に我々も強く認識すべきである。当然のことであるが，高等学校学習指導要領解説特別活動編（文部科学省，2009；以下，学習指導要領解説と表記）に準拠しながら指導することが大切であり，辛夷祭（特別活動）の指導について，以下の3点を具体的に提案する。

辛夷祭の目的の明確化

まず，教員間において辛夷祭の目的を明確化する必要があるだろう。そもそも，そのような議論を教員間で起こすことが大切である。辛夷祭の目的に関して，教員全員で同じ目的に統一することはないが、能力育成の場であることを意識しながら指導するという共通認識は持ちたい。

年間指導計画の策定

学習指導要領解説（文部科学省，2009）でも示されているように，特別活動についての年間指導計画を立てなければならない。しかし，ここでは辛夷祭に関しての年間指導計画（祭り終了後9月から次年度の祭りの9月まで）を教員が設定し，それに基づいて指導したい。

生徒の変容の把握

次項③にも関連するが，生徒が具体的に辛夷祭を通して，能力が育成されたことを客観的に示す根拠（エビデンス）が必要である。目的・計画・評価という指導の一連の流れをつくるということであろう。

③能力育成の観点での指導　～PBLの視点の導入～

理想とすべき，あるべき姿をゴール（目標）として設定して，計画的，効果的に課題解決をする過程を通して，ゴールの実現を目指すのがPBL（Project Based Learning）という学習法である。その際，生徒たちが自己の成長を実感しながら活動を進め，成果よりも成長（コンピテンシーの獲得）に重きを置くという特徴がある（鈴木，2012）。辛夷祭運営やユニット活動においても同様の発想の下，以下の3つの指導を計画している。

プロジェクトシート・ポートフォリオの作成

鈴木（2012）などを参考に，プロジェクトを俯瞰するためのシートを作成し，指導の際に使いたい。プロジェクトシートは，ゴールを明確にすること，ゴールに至るプロセスを明確にすること，プロセスの達成度を把握すること，自己の成長が見えることなどを目的としている。

また，プロジェクトシートが散逸せずに，かつ自己の変容を自覚できるように，ポートフォリオを作成し，生徒たちにプロジェクトシートを管理させたい。

ルーブリックの活用

辛夷祭を能力育成の場と捉えるのであれば，生徒の能力面での変容を測る必要がある。ポートフォリオ内のプロジェクトシートから生徒の変容を測ることも出来るが，教員の立場からルーブリックを事前に作成し，客観的に変容を測定したい。また，ルーブリックは生徒に変容を促す道標としての役割も持っている。

以上のような対策を，代替わりとともに実施し，より充実した来年度の辛夷祭に向け，準備を始めたいと思う。

引用文献

安彦忠彦（2014）「コンピテンシー・ベース」を超える授業づくり　～人格形成を見すえた能力育成をめざして～，図書文化，pp.20-22

鈴木敏恵（2012）プロジェクト学習の基本と手法，教育出版，pp.18-31, pp.172-182

文部科学省（2015）教育課程企画特別部会における論点整理について（報告），教育課程企画特別部会，pp.7－8，pp.21-23，p.46，p.130

文部科学省（2009）高等学校学習指導要領解説　特別活動編，p.64

ライチェン D. S.・サルガニク L. H.（2006）キー・コンピテンシー ～国際標準の学力をめざして～，赤石書店，pp.88－121

Ridgeway, C.（2001）Joining and functioning in groups, self-concept and emotion management, pp.205-211

生徒のみなさん

生徒指導部

アンケート協力のお願い

先日までの辛夷祭お疲れ様でした。さて，本校生徒指導部では，学校行事，特に辛夷祭の意義や意味づけを改めて評価したいと考えています。みなさんそれぞれに辛夷祭に対して，思い入れや考えがあると思いますが，それらを感覚的に議論するのではなく，アンケートを取り，集計して，定量的に捉えることができれば，今後の辛夷祭の改善にも繋がるかもしれません。なお，アンケートの結果は本校紀要や研究会で発表する基礎資料と致します。是非，アンケートに協力して下さい。

◎アンケート収集について

目的：生徒の持っている辛夷祭の現状に対する意識を把握すること。来年度以降の生徒指導のための基礎資料を作成すること。辛夷祭を通して生徒はどのような変容を自覚しているのか明らかにすること。

対象：1〜3 年生全生徒

締め切り：10/5（月）17:00

◎アンケート回答について

回答方法：以下の QR コードを読み取り（URL を打ち込み），回答ページにアクセスして下さい。

回答ページ URL：　http://goo.gl/forms/Ce5GEKReH1

※なお，集計者は，回答者の Google アカウントが分かるため個人を特定することができます。しかし，アンケートの回答内容は上記の目的以外の分析に使われることはありません。結果の公表に伴い，個人が特定されるようなことはありませんので，安心して回答して下さい。

◎質問内容

Q01　あなたは何年生ですか？（選択：1 年生　・　2 年生　・　3 年生）

Q02　あなたの性別は？（選択：男子　・　女子）

Q03　あなたはどのような立場で辛夷祭に参加しましたか？
（選択：辛夷祭委執行部（3 年演担）　・　辛夷祭委　・　ユニ責　・　一般生徒）

※以下の質問に対して，5（大変あてはまる），4（少しあてはまる），3（どちらとも言えない），2（ほとんどあてはまらない），1（全くあてはまらない）の 5 段階で評価して下さい。

※辛夷祭委執行部（3 年演担）・辛夷祭委は辛夷祭の運営について，ユニ責・一般生徒は各ユニットの活動について以下の質問に回答して下さい。

Q04　辛夷祭に積極的に参加することができた。

Q05　辛夷祭の準備の負担が大きい。

Q06　辛夷祭で満足感や達成感を得ることができた。

Q07　辛夷祭の目的は，学校生活における思い出をつくることである。

Q08　辛夷祭の目的は，コミュニケーション能力や問題解決力などの能力を獲得することである。

Q09　辛夷祭を通して，本校の魅力を外部に発信することができた。

Q10　辛夷祭での経験が，日常生活に活きた場面があった。

Q11　ユニット活動の準備や辛夷祭運営において，同じユニットや委員会の生徒ともめたことがある。

Q12　ユニット活動の準備や辛夷祭運営において，イライラしたことを友人にぶつけたことがある。

Q13　ユニットや辛夷祭委員会内で議論する際，相手の立場になって考えることができた。

Q14　ユニット活動の準備や辛夷祭運営において，ユニットや委員会の友人との絆が深まった。

Q15　ユニットの活動や辛夷祭の運営に献身的に参加することができた。

Q16　ユニットや委員会での話し合いの中で，自分の考えを示すことができた。

Q17　ユニットや委員会での話し合いの中で，他人の考えに耳を傾けることができた。

Q18　ユニットの活動や辛夷祭の運営において，自分の役割を見つけ，責任を果たすことができた。

Q19　ユニットの活動や辛夷祭の運営においては，ユニット責任者や辛夷祭課長などに言われた仕事を主にしていた。

Q20　ユニットや辛夷祭委員会内で意見の対立・葛藤があった。

Q21　ユニットや辛夷祭委員会内で意見の対立を解決する場面が見られた。

Q22　ユニットや辛夷祭委員会内でお互いの意見を主張し，合意を形成する場面が見られた。

Q23　より良いユニット活動や辛夷祭の運営のためには，意見が衝突するのもやむを得ない。

Q24　辛夷祭におけるモチベーション（やる気の根源）は満足感や達成感を得られることである。

Q25　辛夷祭におけるモチベーション（やる気の根源）は良い賞をとることである。

Q26　辛夷祭の伝統のようなものを気にする，縛られることがある。

Q27　辛夷祭の内容は，内輪ウケが多いと思う。

Q28　ユニットの活動や辛夷祭の運営の企画・計画を立てるのに積極的に参加した。

Q29　ユニットの活動の準備や辛夷祭の運営において，計画的に物事をすすめることができた。

Q30　ユニットの活動や辛夷祭の運営は，お客さんが楽しむことを第一に考え，計画することができた。

Q31　ユニットの活動や辛夷祭の運営は，自分たちがやりたいことをできるように計画することができた。

Q32　ユニットの活動や辛夷祭の運営は，十分な話し合いのもとに計画することができた。

Q33　ユニットの活動や辛夷祭の運営は，ユニット全体での話し合いのもとに計画することができた。

Q34　辛夷祭募集要項の内容（自分のユニットに関する内容のみでも構わない）を把握している。

Q35　ルールを守って，ユニットの活動や辛夷祭の運営ができた。